

旺文社文庫

次郎物語（中）

第三部・第四部

下村湖人著



旺文社文庫

次郎物語(中)

第三部・第四部

下村湖人著

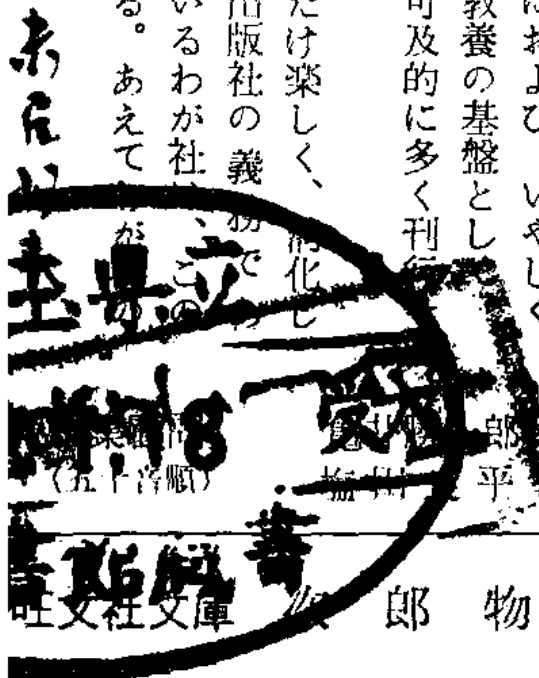
旺文社

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやすくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤とし、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、やすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社が、目的にひたむきに献身するものである。あえて志を理解されご支援あらんことを。



茅 誠 司 木 村 毅
中 島 健 藏 森 戸 辰 男

郎 物 語 (中) 280円

昭和40年 7 月 10 日 初版発行
昭和40年 9 月 10 日 重版発行

著 者 下 村 湖 人
発行者 赤 尾 好 夫
印刷所 大日本印刷株式会社

発 行 所 © 株式会社 旺 文 社
東 京 都 新 宿 区 横 寺 町
電 話 (269)-2111 (大代表)

目次

第三部

三

第四部

二三

解説

福田清人

人と文学

(上巻)

作品解説(第一部・第二部)

(上巻)

”(第三部・第四部)

五〇

”(第五部)

(下巻)

作品鑑賞

(下巻)

「次郎」と私

横地倫平

五〇八

少年の頃

内田清治

(上巻)

台北高校時代の思い出

滝沢寿一

(下巻)

代表作品解題

(下巻)

参考文献

(下巻)

年譜

(下巻)

挿絵

谷 俊彦

原文は新かなづかいに改めたほか、原文の表現をそこな
わない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。
また、難解な語句や事項には、小活字を傍注を加えた。

（編集部）

第三部

一 運命の波

次郎の中学一年の生活も、二学期が過ぎて、新しい春がめぐって来た。入学試験に一度つまずいた彼は、もうそろそろ青年期に入ろうとしているのである。

青年期になると、たいていの人々が、程度の差こそあれ、理想と現実との板ばさみになって、光明か暗黒かの岐路^{きろ}に立つものだが、読者が、これまで、いくぶんせつかちだと思われるほどの気持ちになって知りたがっていたのも、おそらく彼のそうした生活であつたらしく私には思われる。で、私も、この巻ではできるだけ彼のそうした生活について語りたいと思つてゐる。

だが、言うまでもなく、青年期の生活は、青年期だけで独立してはじまるものではない。青年次郎の生活を準備したものは、まさしく少年次郎であつた。少年次郎の生活は、ちょうど山川^{さんせん}の水が平野の川を流れて行くように、青年次郎の中に生きて行くのである。だから、少年次郎を知ることなしには、青年次郎の喜びも悩みもほんとうにはわからない。そこで私は、これから始めて彼を知ろうとする人々や、これまで彼を知るには知つていても、彼の十五年間の生活の意味を、まだじっくりと考へてみる時間を有しなかつた人々のために、ここでいちおう彼の過去をふりかへつて、私の次郎観といったようなものを述べておきたいと思う。読者の中には、あるいは、それをむだだと思ふ人があるかもしれない。しかし、それがむだであるかどうかは、いちおうそれに眼をとおしてから決めてもらつても、おそくはあるまいと思う。と言うのは、むだなことを読むよりも、むだなことを書くことのほうが、はるかにより多くの時間をむだづかいするものだということを、最もよく知つてゐるのは、読む側の人ではなくて、書く側の人なのだから。

*

次郎の天性——くわしくいうと、彼が生まれ落ちたときに、天から授かった生命の生地きじのままのすがた——が、どのようなものであったかは、むろんだれにもわかるはずがない。それは、おそらく、神様だけの胸に納まっていることであろう。およそわれわれが個々の人間の性質について知りうることは、その人間が、この世の空気を多少とも呼吸したあとのことなのである。そして人間は空気とともに運命をも呼吸するものだが、その運命は、人間の天性を決して生地のままにはしておかないものなのだ。

とりわけ、次郎はかなりきびしい運命の持ち主であった。しかもその運命は、生まれてすぐの子供にとつてはほとんどその生活の全部だともいふべき母乳が、母の乳房に十分めぐまれていなかったという事実にはじまったのである。もっとも、母乳の欠乏というようなことは、何も取りたてて言うほど珍しいことではなく、世間には母の思慮深い処置によつて、それを運命というほどの運命と感ぜないで育つて行く子供も、ずいぶん多いのである。だから、次郎の場合、もし母の無思慮、というよりは、その生半可なまはんかな教育意識が、乳の欠乏ということをしつかけに、つぎからつぎへと母としての不自然さの罪を犯してさえいなかったら、次郎の運命はあるいは全くちがったものになっていたのかもしれない。そう考えると、彼のきびしい運命は、母の乳房からはじまったと言うよりは、その乳房の二三寸奥のほうからはじまったと言うほうがおそらく正しいであろう。

ともかくも、お民たみのような母をもつた子供が、生まれ落ちた時に授かった天性をそのまま伸ばしていけるものかどうかは、すこぶる疑わしいのである。われわれは、これまで、次郎がしばしば怒り、悲しみ、あざ笑ひ、嘆き、そしてさからうのを見て来た。また、時としては、疑い、悶えもだえ、省かえり

み、恥じ、そして考えこむ姿にも接して来た。彼は、勇敢であると同時に怯懦^{きようだ}であり、正直を愛すると同時に策謀^{さくぼう}を好む少年であるかにさえ思われたのである。あるいは、そういうのが彼の本来の面目であつたかもしれぬ。そして運命がたえずそれに糧^{かて}を与え、彼という人間をいつそ彼らしく育てあげていたとも言えるであらう。しかし、また、彼が天から授かつた性質はもっと純粹でなごやかなものであつたのに、運命がそれをゆがめ、こねまわして、ついに彼ならぬ彼を作りあげてしまつた、と言えないこともないのである。だが、そうしたことの判断は、しよせん、神様だけにおまかせするよりしかたがない。かりにその判断が我々に下せたとしても、過去の運命というものが我々の手で帳消しできない以上、また、かりに帳消しできたとしても、帳消しにすることによつて次郎が現在以上の人間になれると請^うけ合^あえない以上、今さらとやかく詮議^{せんぎ}だてしてみても、はじまらないことなのである。

次郎について、われわれの知っておかなければならないもっと大事なことは、神のみが知る彼の天性が、彼のきびしい運命と取^と組みあつて行くうちに、彼が一個の生命としての健全さを失ひはしなかつたか、ということである。彼の天性が、天性のまま伸びたかどうかは、「永遠」に向かつて流れて行く生命の立場からは、元来たいした問題ではない。生命の流れは「運命」の高低によつて、あるいは泡だちもしようし、あるいは迂回^{うかい}もしよう。また、時としては、真暗な洞穴をくぐる水ともなろう。かりに、最初東に向かつて流れ出したのが西に向きをかえたとしても、途中で滞^{とどこや}りもかれもせず、そして、運命の岩盤^{がんばん}の底からさえも新しい水を誘^いだして流れに力を加え、たゆむことなく「永遠」の海に向かつて流れることをやめないならば、それは一個の生命としての健全さを失つたものとは言えないであらう。大事なのは、次郎がはたしてそうした健全な生命の持ち

主であつたかどうかということであるが、その点では、われわれは彼をある程度信用してもよかつたようである。

次郎は、よかれあしかれ、たえず何かの喜びを求める少年であつた。そして求めるためには、決して立ちどまることを肯^{がえ}んじない生命の持ち主であつた。彼は、彼の幼年時代を、すべての健康な子供がそうであるように、ひとびとに愛せられる喜びを求めて戦つて来た。そして求めた愛が拒^{ひか}まれると、彼の戦いは相手に対する反抗や、虚偽^{きぎ}の言動となり、また第三者に対する嫉妬^{しと}ともなつて現われたのであるが、それはむしろ、求むる心の熾^し烈^{れつ}さを示すものにほかならなかつたのである。

——求むる心は水の流れと同様、その流れが急であればあるほど、障害にぶつかつて激するものだが、このことは、幼い子供をもつ母親にとって忘れられてはならないことなのである。それは、幼い子供が何よりも激しく求めるものは母の愛だからである。次郎の母が、次郎が十一歳になるまで、このことに気がつかなかつたということは、次郎にとつても、母自身にとつても、何という不幸なことであつたろう。しかし、同時に、その不幸が次郎の求むる心を打ちひしぐほどのものでなかつたということは、彼の生命の健全さにとつて、何というしあわせなことであつたろう。

次郎が、ついに母の至純^{しじゆん}な愛を勝ち得たときの喜びは、それが久しく拒まれていたものだっただけに、限りなく大きいものであつた。この時の彼の喜びこそ、彼を「永遠」への門に近づける第一歩だったとも言えるであらう。彼の愛を求むる心の態度は、それを一転機として飛躍的に深まつていった。彼は、それ以来、もう完全に一個の自然児ではなくなつたのである。そして、間もなく、母の死という悲しい運命によつて、無限に尊いその愛が失われた時でさえも、彼は、その死を乗りこえて母の愛を信ずることができたのである。

むろん、彼がこうした戦いを戦いぬく力は、彼自身の内部だけにあったとは言えない。もし、彼を里子として育ててくれた乳母のお浜の、ほとんど盲目的だとも思われるほどの芳醇な愛や、彼の父俊亮の、聡明で、しかも素朴さを失わない奥深い愛が、いつも彼の背後から彼を支えていてくれなかったならば、そして、また、彼が物心づくところから、しばしば入りびたりになり、あとでは、生家の没落のために、ただ一人その家に預けられさえした正木一家——母の実家——ののびのびとしたあたたかい空気が、彼を包んでいてくれなかったならば、彼の求めてやまない魂も、あるいは何かの機会にひしゃげてしまっていたのかもしれない。人間は、全然食物のないところでは生きることができず、全然光のない世界では物を見ることができなと同様、全然愛のない世界では希望をつなぐことができないものなのである。彼が、怒り、泣き、悲しみ、そして疑いつつも、ともかくも内なる生命の火をかきたてて生きる望みを失わなかったのは、そうした愛の支えがあったればこそである。そしてその点では、彼は恵まれすぎるほど恵まれた子供であつたともいえるであろう。世には、もっときびしい運命のもとに育っている子供がざらにある。われわれは、あつてのない隣人愛だけを唯一の支えにして生きなければならぬ子供が、ここかしこにうろついていることを忘れてはならないのだ。

亡くなった母の遠い世界からの愛を信じ、それを清澄な暁の星のようにさえ感じていた次郎が、間もなく継母を迎えなければならなくなったときの惑乱、しかもその継母が、彼を愛するためのみ迎えられると知った彼の狼狽は、あわれにもまたほほえましいものであつた。彼は、そうした惑乱と狼狽との後で、亡くなった母への思慕を胸深く秘めつつも、結局、すなおに新しい母の愛に抱かれる喜びを味わうことができたのであるが、それは、彼が、彼を愛しようとする人に顔をそむけ

てまで暗いところを見つめるほど、ひねくれた心の持ち主ではなかったことを証明するものであった。彼のこのすなおさは、やがて大巻一家——継母の実家の人々——とりわけ、彼のためには、新しい祖父であった運平老の仙骨(せんとく)によって、いよいよ拍車(はししゃ)をかけられることになり、彼の生命の健康さは、継母を迎えたためにかえって増進して行くかにさえ思われたのである。

運命は、しかし、そのすなおな生命を、間もなく裏切りはじめた。彼の運命の最も冷酷な代弁者は、いつも本田のお祖母さんだったが、この時もまたそうであった。お祖母さんは、彼に対する愛の欠乏から、彼をして中学の入学試験に失敗せしめる原因を作り、また継母の彼に対する愛を他の子供に向けかえさせるためにあらゆる手段を用いた。こうして彼は、ふたたび新しい形での里子に押しもどされようとしたのである。彼も、さすがにその時には、喜びに対する一切の望みを絶つかとさえ思われた。彼は、彼がこれまで求めて来た人々の愛を強いて拒みはじめた。愛を求める彼自らの心を、恥じ、おそれ、さげすみはじめた。そして十四歳の少年にしては、あまりにもむごたらしい自己嫌悪(じこけんお)にさえ陥りかけたのである。こうしたことが若い生命にとっての大きな危機でなくて何であろう。

だが、こうした危機ですらも、彼の場合においては、決して彼の生命の不健全さを示すものではなかった。むしろ、それは、彼が彼の運命に打ち克つ新たな道への曲がり角に立ったことを意味したのである。彼の眼はそれ以来次第に内に向かつていった。そして、彼は彼がこれまで求めて来たものが、いつも彼自身の外にあったのを知った。外なるものはいつも動く。内に不動なるものを確立しないかぎり、その求むる喜びは泡沫(ほうまつ)のごときものにすぎない。彼は、そうした真理におぼろげなが

ら気づきはじめた。そして、いよいよ、自分の弱さと醜^{みにく}さを恥じ、自己嫌惡に拍車をかけていった。この自己嫌惡は、しかし、同時に彼の自己鍛練^{じこたんれん}であり、彼が真の意味で彼自身の生命を開拓して行くための大きな転機^{ないせき}だったのである。彼は沈黙がちになり、心から笑うことも怒ることもできなくなった。それは彼の内省^{ないせい}による心の分裂を示すものであった。また彼は、時として思いきった言動にも出た。それは、むろん、彼自身では、ある確信をもってやっていたことではあったが、はたから見ると必ずしも正しかったとばかりはいえなかった。むしろ、周囲の人々をして眉^{まゆ}をひそめしめるようなことが多かったのである。だが、もし「考える」ということが人間を人間らしくする最もたいせつな条件の一つであるならば、彼がその間に人間として伸びつつあったことだけは、たしかである。われわれは、青年期に近づいた少年が、沈黙がちになったり、すなおでなくなったり、そのほか、大人の常識では理解のできない言動に出たりするのを見て、直^{ただ}ちにその少年が生命の健全さを失いつつあるものと速断してはならないのだ。飛行機でも船でも、その方向を転ずるためには、必ずその胴体を傾ける。そしてその方向転換が急角度であればあるほど、その傾きも大きいのである。次郎が、これまで外に求めていたものを内に求めるようになるために、はなはだしく心の平衡^{へいこう}を失ったのは、むしろ当然だったといわなければなるまい。その意味で、私は、彼の自己嫌惡が自己嫌惡に終わらず、その失われた心の平衡が、彼自身を転覆^{てんかく}させるほどはなはだしいものでなかったことを、むしろ彼のために祝福してやりたいとさえ思うのである。

だが、この場合にも、われわれは、彼が彼自身の力のみで彼の生命を健全に保つことができたと思つてはならない。愛の支えは、いかほど独立不羈^{ふきぎ}になろうとする生命にとっても必要なものであ

(1) 他に頼らず、また束縛もされないこと。

る。愛は、愛を拒もうとするものにこそ、最も聰明に与えられなければならないのだ。

では、次郎に対してこの役割を果たしたものはだれだったか。それは、もはや乳母や、父や、正木老夫婦ではなかった。というのは、彼らのうちのあるものは、それに堪えうるだけの聰明さを十分に持ちあわせていたとはいえ、次郎にとっては、あまりにも身近な相手であり、そして、彼らの愛に溺れることを、彼自身強いて拒もうとしていた相手だったからである。

この場合、次郎が、権田原先生の教えをうけていたということは、何というしあわせなことであつたろう。権田原先生の教え子に対する愛には、深い思想があり、寛厚で、しかも枯淡な人格のひらめきがあつた。そしてその愛の表現には、次郎が強いて拒もうとする、色の濃い、血液的な表現とは、かなりちがったものがあつた。次郎にとっては、それは愛というよりは、何かもつと質のちがった、高貴なもののようにさえ感じられていたのである。かような種類の、身边にいてしかも高く遠いところから与えるといったような、迫らない、思慮ある愛こそ、次郎のように「考える」ことをはじめた少年にとっては、何よりもたいせつな愛だったのである。

大巻運平老の仙骨と、その息徹太郎の明敏で快活な性格も、また権田原先生に劣らず重要な役割を果たしていた。この二人は、ともに、何か第一義的なものを心の底につかんでおり、しかも、二人の間柄は、親子というよりはむしろ友だちといったほうが適当なほど、愉快なものであつた。氣のまわることでは本能的でさえあつた次郎が、継母の父であり弟であるこの二人に、何のこたわりもなく近づき得たのも、そうした二人の間柄が、おのずと彼にまで延長されていたからであらう。次郎は、二人に近づくことによって、愉快的空気を呼吸し、いつとはなしに、彼自身の生命を健康に保

(1) 心がひろやかでおとなしく、俗っぽさや欲氣がなく、あっさりとしている中に深い味わいを感じさせる人格。

つ力を汲みとっていたのである。もっとも、二人の彼に対する愛は義理ある関係から生じたものであり、したがって、最初はいくぶん作為さくゐされたものであった。しかし二人がつかんでいた第一義的なものは、その愛の表現を決してぎごちないものにはしなかったのである。

兄の恭一が次郎を支えていた力も、決して小さいものではなかった。恭一の胸には、青年期の初期にありがちな鋭い正義感が燃えていたが、それが彼の次郎に対する愛の表現を特異なものにした。青年や、青年期に近づいた少年の動揺する心を最も有効に支えうるのは、多くの場合、同年輩か、あるいは、あまり年齢のへだたりのない年長者の、こうした種類の愛である。次郎がそのころ、乳母の愛とともに、彼にとって至上しじょうのものであった父の愛をすら拒もうとしながら、兄との親しみを日ごとに深めていった秘密は、そこにあったのである。

幼年期から少年期の初期にかけては、たいていの人間は、よき親を恵まれることによって、自分の生命の健全さを保つことができるものである。だが、そろそろと青年期に近づくにしたがって、よき師と、よき兄弟と、よき友とは、時として、よき親以上にたいせつになって来るものだ。それは決して次郎の場合だけには限られないであろう。

次郎の危機は、おおかた一年近くもつづいた。しかし彼は、こうして、彼自身の内からの力と、周囲の人々の外からの力とによって、ともかくもそれを切り抜けることができた。そして間もなく待望の中学にはいることになったが、その第一日に上級生からうけた無法な暴行は、幼年時代から彼の心に芽ぐみつつあった正義感を一挙に目ざめさせた。同時に彼の関心の中心は家庭から学校に移り、小さいながらも、一つの「社会」が、彼の前にそろそろとその姿を現わしはじめたのである。

彼の正義感は、葉隠れ四誓願の一つであり、そのまま校訓の一つともなっていた「大慈悲」の精神と結びついて、彼をして、半ば無意識のうちに「愛せられる喜び」から「愛する喜び」へと、その求むる心を転ぜしめていた。そして、彼が、兄の親友で、「親爺」の綽名で生徒間に敬愛されていた大沢と相しることを得たことは、正義と慈悲への彼の歩みを、いっそう強健なものにしたのである。

そのうちに、彼は、ある日、はしなくも、卑劣な一上級生によって、忍びがたい侮辱を加えられ、ついに敢然として立ちあがることになった。この時、彼は、彼の手に小さな兇器をさえ握っていた。そして、彼の唇からほとばしり出た正義と公憤の言葉は、卑劣な暴力においてはひけをとらないさすがのその上級生を、ぐいぐいと窮地に追いこんでいったのである。

この思いきった闘争のあとで、彼が朝倉先生の「澄んだ眼」を発見し、その唇をとおして「みごとに死ぬことによってみごとに生きる」大慈悲の道を聞き得たことは、彼がはじめて肉親の母の愛を感じた時にも劣らないほどの大きな感激であった。

彼は、あとで、この大きな感激の原因となったものを、つぎつぎにさかのぼって考えていったが、その直接の原因が、かの卑劣な上級生であったことに気がついて、因縁の不思議さにまず驚いた。しかも、原因は無限に広がっていた。乳兄弟のお鶴、乳母、そうして亡くなった母、とそこまで考えていって、彼は、人間相互のつながりの深さと広さに思っていたり、ついに、ある神秘的なものにさえふれていったのである。これが彼の宗教心の芽ばえでなかったと、だれが言い得よう。

この時の彼の深い感激は、彼をして「愛せられる喜び」を求むる心から「愛する喜び」を求むる